

S S T K

156 号

## センター 21 通信

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

い ず ちようふうかん                      ごう      けいぞく      もと                      ていげん  
伊豆潮風館・おおぞら号の継続を求める提言へ

さいたまけんしやうがいしやしきくすいしんきようぎかいうご  
埼玉県障害者施策推進協議会動く

埼玉県が、リフト付きバス「おおぞら号」を令和 7 年度で廃止、伊豆潮風館廃止の検討をすると発表したことを受けて、一般社団法人埼玉障害者自立生活協会がこれに反対する意見書を出し、存続を求める署名を始めたことは、センター 21 通信前号でお知らせしました。

今回の県の決定の内容、その手順について、県内の障害者団体から疑問、不服、抗議の声が上がっています。

県の障害者プラン作成にかかわり、その執行状況を監視する埼玉県障害者施策推進協議会（障害者団体 14、社会福祉士団体 1、大学教員 2、一般公募 2）では、県の障害者支援計画に入っている件の事業が、当協議会に事前の情報共有や意見交換がないままに事業廃止へと決められていったことは決定過程として不適切だとして、

- ・両事業の継続と代替措置の検討
- ・利用者・障害者団体の意見聴取の徹底と決定過程の透明化

を求める緊急提言を 12 月 15 日に埼玉県におこないました。今後の協議会、埼玉県の動きを注視したいと思えます。



ごう い ず ちようふうかん こま  
おおぞら号、伊豆潮風館がなくなると困ります。

の りようクラブ おおす かけいそう  
ふじみ野ふれあい旅行クラブ 大須賀啓三

ふじみ野ふれあい旅行クラブは、バス旅行を通して障がい者の交流と社会参加を図ることを目的として、2014年3月に立ち上げました。バス旅行の車内は、笑顔・笑顔・笑顔、そして明るい話声、楽しい光景があふれています。障がいを持った子供たちが会うたびに成長がみられることがなにより嬉しいことです。

埼玉県県の福祉バスおおぞら号、さわやか号（潮風館送迎）を利用させていただき、埼玉県、山梨県、長野県、群馬県、千葉県、茨城県、栃木県、神奈川県、静岡県、9県と東京都の観光地、文化施設の見学に行きます。目的地での多くの方との出会いが大きな財産となり、1日同じ空間で過ごすことにより絆ができ、地域社会での活動に大いに役立っています。伊豆潮風館のおかげで宴会場での食事・カラオケ、大浴場の利用、家族以外の方との同室宿泊などいろいろな体験ができます。

おおぞら号の場合は 1500円前後、伊豆潮風館（1泊）の場合は 12000円前後と大変割安な参加費でバス旅行を実施でき、令和7年12月時点で 122回となり、会員は 110名となりました。これも埼玉県の施策のおかげです。今後より多くの方が参加して 150名、200名になるようにと活動してまいります。

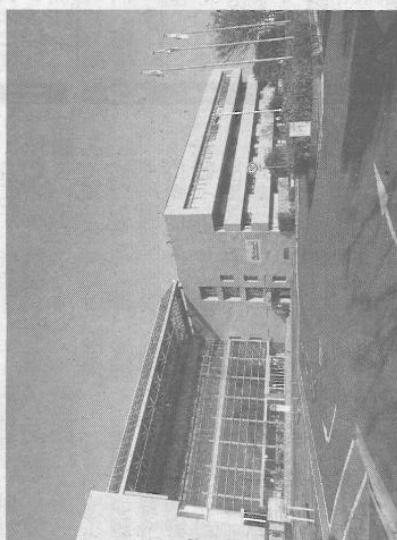
もし、伝え聞く通りおおぞら号が廃止になるとするならば、私たちが日帰り旅行で民間の貸し切りバスを利用した場合、バス料金の 3割から 4割補助してもらえば、参加費 5000円前後（昼食代はのぞく）で実施できるかと思えます。こうした代替策を検討してほしいと思えます。

## 県活センター

## 廃止提言に利用者反発

## 県検討、聞き取り開始

廃止の提言がされた県民活動総合センター  
—伊奈市内宿舎



伊奈町にある県民活動総合センター（指定管理者「公益財団法人いきいき埼玉」）の存続を巡って、市民や利用者間に動揺が走っている。廃止は今年8月に公表された県の公の施設の在り方に関する報告書。大学教授らで構成される有識者会議が、県保有施設の集約化や廃止を含めて検討し、必要性和活用方をまとめた。県活センターについては「県が運営すべき施設としての役割を終えている。施設を廃止すべき」と提言が出され、反発する声が高まっている。県は最終的な結論を出していないとしており、方向性を検討するため関係者の聞き取りを開始した。（高野卓美）

△、戸野部直乃県議（公明）が相次いでこの問題を取り上げた。「有識者会議のプロセスが適切だったか」「美観把握や意見聴取は十分だったのか」などを問いただし、知事は「廃止ありきではなく、あらゆる観点から検討を行った上で総合的に判断すべきと考えている」と答弁した。

また、公の施設の在り方、有識者会議と並行して行われていた「県指定出資法人あり方検討委員会」も同時期に報告書を提出。いきいき埼玉に対し、県活センター管理運営事業の廃止を含めた別法人への統合などを提言した。所管する県の共助社会づくり課は「提言の内容について丁寧に把握し、検討していきたい」として、利用者、関係者への聞き取りを一部開始したことも明らかにした。

いきいき埼玉の永代映理事長は「県保有施設であり、廃止については県が検討、決定するもの。当財団は施設の指定管理者として、価値の向上を目指して適切な運営に努めていきたい」とコメントした。

県活センターは、県民のボランティア活動や社会福祉、社会教育活動といった生涯学習の拠点として1980年に設置された。400席のホールや200人以上が収容できる大会議室をはじめ、多目的室、信託室、体育館、テニスコート、茶室などを完備。コヒート、エントランスホールや食堂も併設し、イベントや各種資格試験会場、企業などの研修の場として活用されている。

2023年度の利用者数は、発足当初の2.8倍とな

る約14万5千人。県の市民活動サポートや埼玉未来大学、シルバー人材派遣などの事業拠点になっているため、継続的な利用者は多い。

「ここが廃止されたら、どこで活動すればいいのか」「伊奈町唯一の信託施設で防災避難所なので、なくなったら困る」。廃止の提言を受け、住民や利用者たちは口々に不安を募らせる。有志の会立ち上げ、署名活動を始めた徳江義之さん(88)は「市民だけでなく県内の老若男女が団

体利用している。廃止されたら影響が大きい」と約100名を集めた。インターネット署名は3千を超えている。

今月1日には、存続を求める請願が町議会に採択された。これに先立ち大島清町長は10月28日に県庁を訪れ、要望書を大野元裕知事に手渡ししている。上尾市議会、春日部市議会なども月定例会で同様の意見書が可決された。

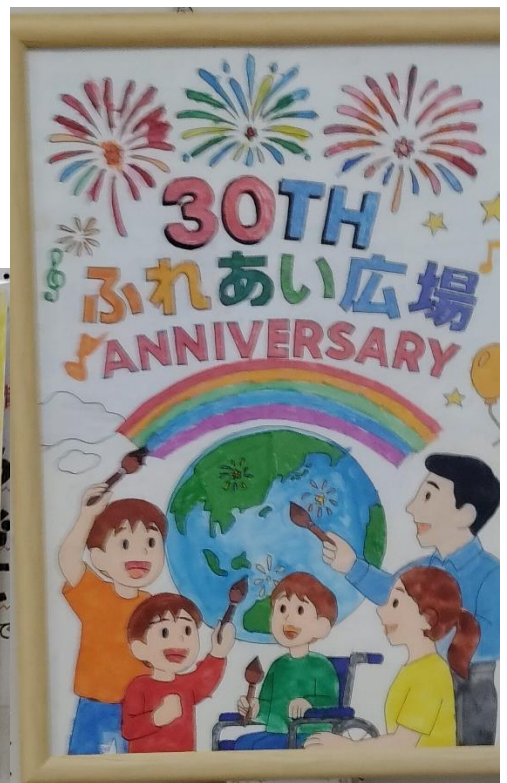
今月5日に行われた県議会12月定例会「際置間では、町田昌介県議（民主）が二

## の し しょうがいしゃしゅうかんすいしんじぎょう ふじみ野市障害者週間推進事業

### だい かい ひろば ひら 第30回ふれあい広場が開かれました。

12月6日（土）市民交流プラザ（フクトピア内）にて行われたイベントに参加しました。  
4月から市内の 22 の障害者施設、関係団体とふじみ野市障がい福祉課が準備会議を重ねてきました。

開会式 10時、2階ホールで開会式。消防音楽隊のオープニングで景気をつけて、高畑市長と加藤市議会議員のあいさつ。その後、公募したポスター、工作、絵画の作品コンクールの表彰があり、協働舎レタスの通所者川崎さつきさんの絵も優秀賞をいただきました。幸せ感があふれる明るい絵です（写真左）。最優秀賞はこばんはうすさくら（児童発達支援・放課後等デイサービス）の子たちが作ったポスター（写真右）でした。



ステージ発表 つづいて希望団体のステージ発表。放課後等デイサービスとB型事業所のきらきら星がハンドベルと歌。自立訓練のマイライフ工房がクリスマスソング。しばらく間をおいて、音楽に合わせてサンタクロースやトナカイやパンダの着ぐるみの一行が現れ、プレゼントを配りながら先導し、協働舎レタスのパドルジャックス体操メンバーが登場しました。月1回作業の後

の余暇活動で練習したアバと AKB48 の曲に合わせて、ステージいっぱいに踊りを（体操？）披露しました。



活動紹介・製品販売 同じころ 1 階では、展示ルーム、ロビー、玄関前で 13 団体が日ごろの活動紹介や製品の販売（パン、クッキー、ベーグル、米粉クッキー、豆腐、ドーナツ、飲み物、ビーズやリース、ストラップなどのハンドメイド小物、古本、不要パソコン回収、花など）を行い、にぎわっていました。別室ではボッチャ体験、手話体験ができました。お昼時には、弁当の製造販売をしている A 型事業所が出張販売をしました。

### 手話による講演－早瀬憲太郎さん

午後、2 階ホールでふれあい広場の 3 本目の柱、講演会が行われました。講師は早瀬憲太郎氏。52 歳。チラシには、デフリンピアン（東京 2025 デフリンピック自転車競技日本代表）と紹介されていましたが、若いころからろう児相手の学習塾を開き「ろうによるろう児のためのろう教育」を掲げる教育者が本業。今も学習塾のほかにろう学校の 1、2 歳児クラスの指導員をしています。映像教材製作から入って、映画の製作、脚本、監督も手掛けています。テレビでは NHK「みんなの手話」で 7 年間講師を務めていました。

「中学生の時にけがで入院して、病室でテレビを見ていた。「おかあさんといっしょ」を毎日見てると面白いが、違和感があった。子供たちはみな健康な子ばかりだ。障害児がいない。私が体操のお兄さんになりたい。手話のお兄さん。障害を持つ子も出したい。それが中学生の時の私の夢だった。」

自転車競技は 2013 年のブルガリアから今年の東京までデフリンピックに 4 回出場しています。今回の講演は東京デフリンピックが終わって間もない時だったので、「デフリンピックで感じたこと」がテーマでした。

デフリンピックを知ったのは高校2年生の時、先生が目指してみたらどうかと勧めてくれたが、その時は興味ないですと断った。その頃は普通高、だったのでろうの仲間がいなかった。2009年の台北のデフリンピックで卓球をみて、自分も出たいと思った。以後、96キロあった体重を30キロ減らした。

今年の東京大会でユニフォームが初めてオリンピック、パラリンピックのユニフォームと同じデザインになった。それまでは別のものだった。それでも「def Japan」と書いてある。ほかの国の人から、なぜ def と入れるのか、ただの Japan でよいではないかと言われた。いつかそうなることを願っているが、いま日本では def を知らせたい。

今年の開会式で都知事の挨拶の際、スクリーンに都知事を挟んで日本手話通訳者と国際手話通訳者の画面が都知事と同じ大きさで映されていた。これは素晴らしいとおもった。日本のテレビ画面では手話通訳は隅のほうに小さく出るだけだから。

東京大会の後のとった妻と私の写真。妻も自転車競技で4回目の出場だった。写真は笑顔だが、本当はメダルを逃して悔しかった。特に妻はこれまで銅メダル2回、前回は銀メダルを取っていて今年は金メダルを期待されてとてもプレッシャーを感じていた。結果は7位だったが、1位になったウクライナの選手が金メダルの副賞のぬいぐるみを妻に渡してくれた。女性選手が少なかった中で妻が連続出場している姿を見て勇気をもらってきたという。国際的には選手同士相手をリスペクトする。日本でもそうなってほしい。

耳が聞こえないからかわいそうだ、大変そうだ、苦しかったのではないかと聞かれることがあるが、私はそう聞かれても、困ったことはないと思っている。耳が聞こえないというアイデンティティがある。手話言語に誇りを持っている。共生社会という言葉は好きではない。一緒に生きているのにわざわざ「共生」と言わなくてもよい。障害に対する「配慮」ではなく、ともに作り上げていく、一緒に考えていきたい。



講演翌日 7日の朝日新聞を開くと、「早瀬憲太郎さん」の文字が目に入った。講演では触れられなかった早瀬さんの塾の指導について、「序破急」というコラムで伊藤裕香子論説副主幹が触れていた。デフリンピック、障害者週間、共生社会といったキーワードがこの記事と重なっている、掲載させてもらおう。

## 序破急



伊藤裕香子  
論説副主幹

ろう者の早瀬憲太郎さん(52)の温かくもまっすぐな指導が、心に残る。

主宰する学習塾に20年以上上通う、田畑快仁さん(28)と向かい合っの講義。

「周りの人たちは、盲ろう者に厳しいことは言いづらい。ほめられることは多くても、それは錯覚かもしれない」と先生。「お父さんもお母さんも私も、いつか亡くなる。はやとが、ひとりで生きなければいけないときが来る」と続けた。

4日付「ひと」欄でも紹介した大学院生の快仁さんは、生まれつきほとんど見えず、聞こえない。師と仰ぐ早瀬さんと2人でこぐ自転車旅に出るのが、夢。「盲ろう者も適切な支援があれば、スポーツに挑戦できる」と、毎日のようにデフリンピックの応援に出かけ、海外の仲間をさらに増やした。プラス思考で、自分で限界をつくることなく、世界をぐい広げている。

そんな自由に発想できる感性を高く評価しつつ、先生は「人を思いやる気持ち」が少し足りない。盲ろうだからできないという言い訳は、絶対に認めない。はやとの方法でやれることがある」と背中を押す。周囲の支えは当たり前ではない。

## ポジティブすぎる我が子へ

誇りを持って一歩一歩自立しながら、周りを助ける力を積極的に伸ばして——。壁とすることは何か、快仁さんに触手話による通訳を介して尋ねた。「相手の表情を読み取れず、気持ちを想像するのは難しい」。微細な揺れや空気を体全体で感じ、頭の中に詳細な地図を描き、一人で外出する。しかし白い杖を持っていた、声をかけられても、盲ろう者であると伝えることに、また壁がある。

息子と共に歩む母の真由美さん(62)は、「いろんな人とながっていることは、一つの安心材料。けれど人に対してポジティブすぎるだけに、様々な巧妙な悪意から身を守れないのではなど、心配は尽きません」と未来を思う。

デフリンピックだから。障害者週間にあわせて。「共生社会」なるものを意識した気分、終わっていないか。それだけの多様な状況や声を、見ずに聞かずに通りすぎていたのではと自戒する。一人ひとりにふさわしい暮らしの姿や支援の可能性とは。誰もが我が子の未来に心配ではなく、安心を抱きながら、生涯を終えられる社会をつくるには。遅ればせながらも、できることを探したい。

朝日 25 12/7

**障害児を普通学校へ！ 全国交流集会 in 埼玉 参加報告**  
**テーマ:「出会えないのはなぜ？」をめぐり、全国から約 200 名が集結**  
**センター21事務局長 竹内善太**

11 月 22 日(土)・23 日(日)の 2 日間、埼玉県岩槻駅東口コミュニティセンターで「障害児を普通学校へ・全国連絡会 全国交流集会 in 埼玉」が開催されました。

オンライン参加を含め、障害のある子どもと一緒に学べる学校を目指して、全国から約 200 名が集まり、熱心な議論と交流が行われました。障害のある子どもや家族、支援者、教育関係者など多様な立場の人々が参加し、それぞれの経験や課題を共有しました。

### 【開会式】50 年の歴史を振り返る

午後 1 時、全国連絡会代表の長谷川律子さんの挨拶で開会しました。

続いて、参議院議員の天畠大輔氏、木村英子氏(れいわ新選組)からのメッセージ、実行委員長野島久美子さんの挨拶がありました。

その後、埼玉の 50 年にわたる就学運動の歴史を振り返る動画が上映され、これまでの歩みと今後の課題を共有しました。

### 【シンポジウム】「出会えないのはなぜ？」

東京大学大学院教育学研究科の小国喜弘教授による基調報告に続き、埼玉県で活動する 4 名のシンポジストが報告しました。

- ・ 野島さん: 定時制高校での学びの経験
- ・ 石川さん: 母親との関わりから「差別」を自分の問題として考えるようになった話
- ・ 山下さん: 学校から地域・職場へつながる視点
- ・ 木村さん: 教育の欠格条項をなくすための法改正の取り組み

コメンテーターの三井絹子氏は、「地域で当たり前に暮らすこと、それを当たり前にしていくのが

フルインクルーシブ教育」とコメントしました。

### 【分科会】4 つのテーマで深い議論

全体会后、参加者は 4 つの分科会に分かれ、2 日目まで熱い議論が続きました。

- ・ 第1分科会「まずは保育園、幼稚園、学校で会いましょう」
- ・ 第2分科会「みんなが居られる学校とは」
- ・ 第3分科会「『合理的配慮』を問い返す」
- ・ 第4分科会「共に学ぶ」と「共に働く」の間を考える」

私は第2分科会にて「不登校から見る障害のある人の就学問題について」を報告しました。

不登校は年々増えていること、9 月 1 日が子どもの自殺の特異日であることの情報提供。

不登校体験やその支援から見てきたのは、現在の公教育が画一的で、指示に従うことを重視しているという現状です。

この構造は、障害のある人が排除される状況と同じ課題を抱えています。

「みんながいられる学校」であれば、不登校も減少するのではないかという視点を共有しました。

### 【まとめ】出会い対話することから社会は変わる

今回の集会を通じて改めて確認したのは、「出会うこと」からすべてが始まるという点です。

学校、地域、職場…どこでも「一緒にいる」ことが当たり前になる社会を目指し、これからも多様な存在について対話を重ね、社会を少しずつ変えていく取り組みを続けていきます。

## しょうがいじ ふつうがっこう ぜんこくしゅうかい い 障害児を普通学校へ 全国集会に行きました！

11月22日、23日の2日間、岩槻駅東口コミュニティセンターにて、「第22回障害児を普通学校へ全国交流集会（全国集会）」が開催され、私はその第3分科会『「合理的配慮」を問い直す』で、センターの1人として発表するという貴重な機会をいただきました。

ここでは、全国集会のようすや、分科会で発表したときの感想等をお伝えします。

### ぜんこくしゅうかい ぜんたいかい 全国集会・全体会のようす

今回は、北は北海道…南は鹿児島。各地から、障害当事者やそのご家族、障害者支援団体の方々、学校関係者等、多くの人が集まっていました。登壇した小国喜弘さんや三井絹子さんのお話も聞いて、教育学的な観点でインクルーシブ教育を研究する人、子ども達に「障害の有無で分離されない」学びを享受してほしいと願う親御さん、自分と同じ悔しい思いをしてほしくないと思っている障害当事者の先輩、みんなと同じ教育を受けたいと思う現役の障害のある学生や児童等の、色々な当事者が色々な思いで集まったのだと気づいて、胸が熱くなる思いでした。

その後、県庁泊まり込みや自立生活運動等の映像をみて、先人の方々がどのような運動をしてきたのか、そのリアルが伝わってきました。また、会場に飾られている横断幕の実物をみて、これまでの闘いの歴史を如実に物語っているように感じました。

全体会の締め括りで、「わけないで わけないで あなたのつごうで分けないで」というコールを参加者全員で行い、より良いインクルーシブ社会を目指そうという熱意のもと、一つになることができたと思います。



だい ぶんかかい  
第3分科会

第3分科会「『合理的配慮』を問い直す」では、「合理的配慮」のあり方について、実体験や配慮  
事例等の情報を交換し、意見を出し合い、検討していきました。まず、この分科会のコーディネーターで  
ある鹿児島県立短期大学の田口康明さんが、国連の障害者権利条約において「合理的配慮」が  
「平等」を過度に重視するものになっているという問題提起から始まりました。私は、高校時代体育の  
授業の時やむを得ず見学をしていたにも関わらず、赤点扱いで補習を課されたという体験をして「悪  
平等」というものがあると感じたことがあったので、今回それを田口さんはうまく言語化されていると思  
いました。

次に、埼玉障害者市民ネットワーク代表の野島久美子さんは、34才で高校に入学し、通学すること  
に際し、学校や利用した駅においてどのように合理的配慮ができていったのかを話されていました。  
駅員の協力を仰いで駅の階段を昇り、遠足での介助等について学校と揉めたりしながらも、今よりも  
「合理的配慮」やバリアフリーが不十分であった時代のなか、5年間かけて普通学校に通ったという  
経験を通して、「失敗してもいいからやってみる」ということの大切さを学んだと語っていました。障害に  
関わらずすべての若者に向けて、周りに流されず自分の意志で冒険する経験をすべきだと激励のコメ  
ントを述べていて、「当たって砕けろ」という精神で色々なことに挑戦してきた私自身のこれまでの  
人生と重ね合わせて、感慨深く感じつつ、これからもこの気持ちを大切に生きていくべきだと思われ  
ました。

その後、私（藤森慎太郎）の番になり、小中高と普通学校に通った経験や、全身性介助人派遣事業  
を利用した大学生活を通しての気づきを述べました。全身性の制度説明が一部伝わりきらない場面が  
あり、質問を受けてあがってしまったものの適切にお応えできたので良かったです。障害をもちながら  
も「制度を有効活用し、高校や大学に行きたい!」と思っている後輩たちの参考になれば嬉しいです。

分科会2日目には、宮澤弘道さんから、小学校教員の立場から「合理的配慮」に関して述べていま  
した。学校文化というものが障害を持つ児童にとっての障壁となりうる場合について、具体例を用いて  
説明されていました。集団行動に重きを置かれるあまり、ルールから外れる児童に厳しい視線が向けら  
れてしまうのかもしれない。頭ごなしに否定せず、なぜその行動をしたのかと児童に寄り添いながら  
指導方針について考えたり、寛容な心で接することも場合によっては必要だと感じました。提供する  
側と受ける側が対話しながら「合理的配慮」の体制構築をすることが重要だと再確認する良い機会で  
した。

第3分科会においては、参加してくれていた実際に学校に通っている学生さんや親御さんからも

色々と貴重な意見を聞けたということもあり、全体を通して有意義な情報交換ができたと思いました。

（藤森）



## 第4分科会（共に学ぶと共に働くの間を考える）1日目報告

### 分科会の問題意識は

地域で学んだ延長で、地域で共に働くことはできないのか？養護学校義務化前は、特殊教育卒業生も今より共に働いていた。養護学校義務化後、高等部に皆行き、地域が遠くなった。法定雇用率は上がるけど、学校で増産された「障害者」を雇いきれず、特例子会社、代行会社が拡大し、「働く」の分離が進んでいる。雇用促進法は地域の大多数の小・零細企業を応援できていない。「共に働く」が進まないのは共に学べていないから？

というもの。越谷市の障害者の職場参加をすすめる会や障害者就労支援センターで働いた山下浩志さんが司会進行を務めた。発表者は普通学校を出て一般就職した障害者とその家族の5人。経営者側からの発言も計画されていたらしいが、これはなかった。

Aさんのお母さん。Aさんは、小・中・高・専門校と一般校、さらに職業リハセンターに通ったが就職が決まらなかったところ、バザーで知り合った食品製造会社の社長さんが雇ってくれて、22年継続している。「普通教育の場で学んだのは、教科書ではなく最も苦手としていた関わり合う力でした。それは周りの子供たちそして私を含めた大人たちも同様で、同じ空間、同じ場を共有し、体験したからこそ生まれた学びでした。」

Bさん。3歳の時に失聴。小学校は難聴学級に通級しながら通常学級で過ごすが、「ずっとひとり」だった。高校卒業後近所の時計会社の下請け会社に就職し8年働き、結婚退職。バブル崩壊後就職先を探したところすぐに決まったが、仕事がなかった。障害者雇用率を満たすための採用だった。転職した次の職場も同様で「差別のシャワーをガンガン浴びた」。3つ目の職場も障害者雇用だったが人事部で「とても充実していた」。3年働いて、57歳で両親の介護で退職。仕事を干されていたころ手話を習い、障害者団体の人たちと知り合った。

C さん。生まれつきの難病だが、「どの子も地域の公立高校へ」の運動に助けられ、高校、大学へ。在学中に障害者運転能力開発訓練を受けて運転免許を取り、佐川急便のアルバイトを始めた。バイトをはじめるとき親も入れて障害の状態、必要な配慮について面談している。就職活動がうまくいなくて、卒業後も宅配の契約社員に。勤務時間の繰り上げをめぐる退職届を書かされたことがあって、親が助けに入り、本社まで連絡して、部署と時間が変わって、現在に続いている。

D さん。身体障害。小学校は普通学級。養護学校高等部卒業。働こうと思ったのは、子供ができて保育園にあずけたとき。障害者雇用の学校の任用職員で障害者支援学級のサポートの仕事に就いた。5 年間働いた。勤務校の教育内容について県交渉で話したり、障害児の親にアドバイスしたりして学校に煙たがられ、生徒のサポートの仕事を干された。精神的につらくなってやめた。

E さん。身体障害。5 歳からリハビリ施設へ。養護学校 4 年の時に地元の小学校への転向を希望し、中学校から普通学校へ。すべての行事に参加でき、同級生が助けてくれ、先生たちの配慮もあって感謝している。試験前から入学拒否するところも少なくなかったがどうにか高校へ。大学は 1 年で中退。職能開発訓練を受け障害者枠で、和文タイピストとして就職したが、仕事させてもらったのは 1 年で、あとの 1 年半は仕事を干されてつらかった。こうした日々障害者運動と出会い、かろうじて自分を保つことができた。会社を辞めて 2 か月後に再就職したが 1 年でやめ、さらに印刷所に就職した。その後結婚子育てで 10 年専業主婦。群馬に引っ越した時に生活保護を外れ、また仕事に就いた。子供が成人した機に一人越谷に移住し、職場参加をすすめる会の活動に参加するようになった。「私にとって『職場参加』とはまずは職場にも障害者がいて、互いに顔の見える関係から地域社会・職場の新たな共生を探ること。それは障害者だけが学校・職場・社会に適応するのではなく、障害のない人たちとぶつかり合い喧嘩・いじめがあっても目の前に相手あってこそ気づきがあります。」

発表者それぞれの就職するまでの苦労、就職してから受けたつらい思い、自分を保つすべとなった活動や仲間など、差別ともみ合う暮らしの手触りが感じられた。

発表後の会場との意見交換では。「仕事へのチャレンジが必要ではないか」という意見に対して、「無理しなくてもよい、地域で生き続けられれば良い」「就労幻想がある」「なにがなんでも就労しないといけないとは思わない。」など、ともすれば自分自身を痛めつけてしまう「雇用」を前提としない働き方を支持する意見も出た。

そうはいつでも、職場が障害者とそうでない者が出会い、すす場であってほしいと、分科会は 2 日目に続いていく。

(記録・有山)



か ぞん 書き損じはがきを あつ 集めています。

センター21 ではか ぞん 書き損じはがきを ゆうびんきょく きって こうかん 郵便局で切手などに交換し、

じ む さぎょう つか 事務作業に使っています。ねんがじょう か ぞん で 年賀状の書き損じなどが出ましたら、

き ふ 寄付してくださると たす 助かります。ふる 古いはがきでもかまいませんの

ねが でよろしくをお願いします。

# きょうどうしゃ つうしん 協働舎レタス通信



## その①

しん しょうかい  
～新メンバー紹介～

すずき りえ  
鈴木 李枝

4月4日 うまれ

こうえん  
公園そうじと、ホステイング  
がとっても大変ですが、が  
んばります。  
ぬりえとおえがきがと  
ても楽しいです。(絵を書  
くのが好きです)



しよくいん  
9月からレタスの職員に  
なりました小林直人です。  
わがやい事もたくさんあり、が  
日々成長している様で、と  
一緒に働いていて、と、思  
います。よろしくお願いします。



## その②

ねんまつはんばい きょうりょく  
～年末販売のご協力～



ありがとうございました

ことし 今年も【こころみ学園】のワインの共同購入と【ス  
ワン】のクリスマスケーキの注文を受付ました。

こころみ学園を応援するとともに、利用者の工賃  
収入にもつながる大切なイベントです。ご協力

いただいたみなさま、ありがとうございました。



おいしいワインとともに、  
よき新年をお迎えください♪

★ワイン代 394本 780,720円

★ケーキ代 16コ 70,800円

※上記のうちの一部がレタスの収入になります

## その③

はんばい さんか  
～イベント販売に参加～

いちじき じしゅくせいかつ お  
一時期の自粛生活も終わ  
り、イベント販売も以前のよ  
うに戻ってきたのでレタスで  
も近隣のイベントに多数、  
参加をしています。見かけ  
たら声をかけてくださいね！



とおおいにしちゅう  
11/1(土)大井西 中まつり

# くまの新聞

★右の写真は、第2ペイカーズで  
のお仕事の様子。工場が広くな  
ってとても快適です！



## ★11月は販売イベント盛り沢山★

イベントの秋！今年のくまのペイカーズでは  
イベントがもりだくさんでした！特に、毎年  
恒例のくまの市は大好評！他にはんどめいど  
フェスタなども出店しましたが、沢山の商品  
を手にとっていただけました、ありがとう  
ございました！！また他のイベントでお会い  
しましょう😊😊😊



イベントではごはん、お菓子、雑貨、植物を販売しました♥」

## ★施設利用者交流会にいきました★



川越市にあるたくさんの施設が集まる  
施設利用者交流会にみんなで行って  
きました！今年20歳のお祝いをして  
もらったメンバーもニコニコ大喜び。  
交流会の前に食べたランチも大満足、  
コンサートも大盛り上がりで、とても  
充実した1日になりました♪

花束をもらって、ハイチーズ★

### ○11月の作業実績

- ・食事作り=20回(518食)、クッキー袋詰め=16,577袋、クッキー箱詰め=4,549箱
- ・お弁当配達=474食、ふじみ野市役所ロビー販売=4回実施（毎週火曜日）、  
川越福祉の店販売=4回実施（毎週木曜日）



# ホームだより



## ホーム合同バス旅行

2025年<sup>ねん</sup>10月<sup>がつ</sup>17,18日<sup>にち</sup>に伊豆<sup>いず</sup>の潮風館<sup>ちようふうかん</sup>

まで一泊旅行<sup>いっぱくりょこう</sup>に行<sup>い</sup>ってきました。マリンタウン<sup>か</sup>で買<sup>も</sup>い物をし、伊豆パノラマパーク<sup>いず</sup>にも行<sup>い</sup>きました。夜<sup>よる</sup>の宴<sup>えんかい</sup>会<sup>お</sup>は大<sup>お</sup>いに盛<sup>も</sup>り上<sup>あ</sup>がりました。来<sup>らい</sup>年<sup>ねん</sup>も行<sup>い</sup>けたらいいです<sup>ね</sup>！



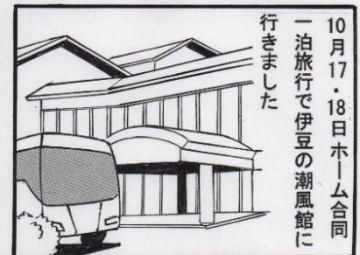
## ホーム合同日帰り旅行

11月<sup>がつ</sup>22日<sup>にち</sup>に白<sup>ひ</sup>帰<sup>が</sup>り旅<sup>りょこう</sup>行<sup>たかおざん</sup>で高尾山

に行<sup>い</sup>ってきました。ケーブルカー<sup>あ</sup>で上<sup>あ</sup>がりましたが薬王院<sup>やくおういん</sup>までは、がんばって歩<sup>ある</sup>きました。すごく混<sup>こ</sup>んでいましたが紅葉<sup>こうよう</sup>がきれいでした！



## ひまわり日記 まきのまさる



# ににんさんきやく 二人三脚だより

特定非営利活動法人 上福岡障害者支援センター21  
自立生活センター二人三脚

Vol. 91

## しどう フジモリ、始動。



おおさか かんさいばんぱく たかいちないかく ほっそく てきごと  
大阪・関西万博、高市内閣の発足…いろいろな出来事があった  
2025年<sup>ねん</sup>も、もうすぐ終わります。皆さんにとって今年<sup>ことし</sup>はどんな  
年<sup>ねん</sup>でしたか？

こんかい へんしゅう たずさ ふじもり ににんさんきやく かた ひごろ かいじょ せ わ  
今回から編集に携わる、藤森です。二人三脚の方には日頃の介助でお世話になっています。  
だいがく だいがくいん そうげい ふくし まな かんしゃ  
大学、大学院の送迎もしていただき、おかげで福祉を学ぶことができ、感謝しています。

わたし だいがくいん ろんぶん しょうがい ようご つか きかい おお わたし あ  
私は大学院の論文で、「障害」という用語を使う機会が、多かったのですが、私は敢えて  
「障がい」とは表記していませんでした。「害」は、本人ではなくその周囲の社会や環境に  
あると 考えているからです。今回は、基本に立ち返り、障害者という言葉の表記について論  
じます。

こらい にほん しょうがい ことば つか どうじ よ  
古来、日本では、「障碍」という言葉が使われていました。当時は「しょうげ」と読まれ、  
ものごと はっせい けいぞく さまた い み ぶつきょうようご え ど まつき  
物事の発生や継続の妨げとなるものという意味の仏教用語でした。江戸末期には「しょうが  
い」と読むようになり、障害を指す言葉になりました。「妨げ」が、障害は個人と社会にお  
けるバリアとの関係性の中で生じるとする「社会モデル」に近いことから、現代でも兵庫県  
宝塚市では、「障碍」が使われています。一方で、平安時代には「障碍」は、「悪霊」「魔物」  
というイメージがつけられ、現在も忌み嫌う人はいるようです。

しょうがい こうしき しょう だいにじせきたいせんご しょうがいかんれん ほうせいび すす  
「障害」が公式に使用されるのは、第二次世界大戦後の障害関連の法整備が進められるよ  
うになってからです。それから、当事者が「害」は不快に感じるのでは、と<sup>い</sup>うことで「障  
がい」と表記する自治体も出てきて、「障害」のままか、「障がい」か「障碍」に改めるか、  
はたまた新しい用語を生み出すのか、現在でもあらゆるところで議論されています。皆さん  
はどんな表記が良いと思いますか？

## ひとりぐらしをはじめました。

おだ まこと  
小田 真

だい 3 ひまわりからセザールだい 3 <sup>かみふくおか</sup>上福岡までひこしをしてから約 5 ヶ月ぐらいやってきました。いまなにをしているのかをちょっとしょうかいをします。

まいしゅう<sup>げつ</sup>月よう日と金<sup>きん</sup>よう日、ににんさんきゃくのヘルパーさんといっしょに<sup>ゆうしょく</sup>夕食づくりをやっています。ぼくもいっしょにつくりながらお<sup>はなし</sup>話をしたりしてやっています。ヘルパーさんのいないときは<sup>じぶん</sup>自分でヤオコへかいものにいたりじぶんのだいす

きなものをかたりして<sup>しょくじ</sup>食事をしています。

まいしゅう<sup>すい</sup>水よう日にヘルパーさんがきていっしょにそうじをやっています。そのほかにせんたくをしたり、<sup>じぶん</sup>自分でそうじをやっています。ゴミのぶんべつをしたりゴミのひにちをかいてあるものをみてゴミをすてています。その<sup>び</sup>日のスケジュールでやっています。へやだい、ガスだいはあんしんサポネットさんにおねがいしています。



## リレーエッセイ

# でるでる CLUB 紹介

並木 理

社団法人埼玉障害者自立生活協会の試みの1つとして、2006年に、担当：並木、巴山で、実行委員を募集して、でるでる CLUB は、復活しました。

その昔には、糸賀さんが、行っていました。でるでる CLUB最初の頃から携わってくれた、熊谷・遊TOピアの大澤隆明さんは、今年、2025年、亡くなりました。

2007年(平成19年)5月27日、当協会の総会第2部「子どもから社会を問う」のワークショップで、スタートしました。

2007年12月1日(土)六本木ぶらり旅(参加者28人)

2008年(平成20年)9月6日(土)でるでる CLUB西部地区焼き菓子作り教室(参加者20人)。竹内善太さんは、息子さんと親子で、参加していました。その当時のでるでる CLUB は、「様々な人を巻き込んで、楽しく外に出よう。」という事業をやっていました。2008年4月5日(土)の社団の理事会で承認され、社団第16回定期総会の議案書に、正式に載りました。

でるでる CLUB は、事業の1つですが、予算は、つかない事業としてのスタートでした。今も、予算は、ついていません。参加者から、参加費500円を集め、細々とやっています。

2008年10月19日(日)越谷養護学校体育館及び校庭で、でるでる運動会・オリンピックを、行いました。(参加者20人)でるでる CLUB実行委員会は、その当時、月2回、夜に、ウィズユーさいたま4階の交流サロンのスペースで、行っていました。

2009年度は、8月の朝霞市の彩夏祭に、でるでる CLUB の店を出した。地元コーヒータイムの人が、顔を出してくれたり、新座の人たちも手伝いに来てくれました。吉田昌弘さんも手伝いに来てくれました。電動車いすに荷台を連結して、動いてくれました。その当時のコーヒータイムの代表は、坂本さとしさんでした。自立生活協会第2代代表です。吉田昌弘さんも、坂本さとしさんも亡くなりました。

2009年(平成21年)10月の所沢市民フェスティバルでは、とことこの家の販売係として祭りを楽しみ、ひたすら立ちました。その当時のでるでる CLUB の活動を、自分たちのお楽しみ CLUB とか、企画屋、イベント屋だとか言う人たちもいたが、2025年(令和7年)9月28日(日)のでるでる CLUBin東京スカイツリーでは、誰もそう言う人は、いなくなりました。

2005年、2006年から数えて、19年目、20年目になる。

一般社団法人埼玉障害者自立生活協会の事業として、ここまで続けてきた、続いてきたことに対して、継続は、力なりを認めてくれたのだと思う。今では、埼玉障害者市民ネットワークのネットワーク合宿や総合県交渉には、行かなくても、でるでる CLUB には、来てくれる人もいます。今まで、コツコツと仕事をやってきたのが、報われてきたような気もしています。

「街に出る出る」が、今の時代では、簡単なようで難しい。昔も今も変わらないことが、わかってくれたようです。

# お知らせコーナー

<div>今後の予定</div> <div><div>1 月</div><div>5 日 日中活動仕事始め</div><div>22 日 二人三脚運営委員会</div><div>23 日 センター21 成人を祝う新年会</div><div>29 日 ホーム運営委員会</div><div>30 日 日中活動運営委員会</div></div> <div><div>2 月</div><div>6 日 ベイカーズ職員研修会</div><div>8 日 ふじみ野市市民活動交流会</div></div>		<div>ふじみ野市市民活動交流会 2026</div> <div>2 月 8 日（日）</div> <div>10 時から 15 時</div> <div>市民交流プラザ「フクトピア」全館にて、展示、ステージ発表、ワークショップ、食品販売（レタスのパン、ベイカーズの弁当も販売します。） など</div> <div>市民活動展示会</div> <div>2 月 2 日(月)から 6 日(金)</div> <div>ふじみの市役所</div> <div>1 階ギャラリー</div>
<div>&lt;目次&gt;</div> <div>伊豆潮風館・おおぞら号の継続を求める提言へ・・・P1</div> <div>伊豆潮風館・おおぞら号がなくなると困ります・・・P2</div> <div>県活センター廃止？（新聞記事）・・・P3</div> <div>第 30 回ふれあい広場報告・・・P4～P7</div> <div>障害児を普通学級へ、全国交流集会報告・・・P8～P13</div> <div>協働舎レタス通信・・・P14</div> <div>くまの新聞・・・P15</div> <div>ホームだより・・・P16</div> <div>二人三脚だより・・・P17</div> <div>ひとりぐらしをはじめました・・・P18</div> <div>リレーエッセイ(並木理さん)・・・P19</div> <div>お知らせコーナー・・・P20</div>		
<div>編集後記</div> <div>12 月 14 日の埼玉新聞に県民活動総合センター（伊奈町）の廃止提言が出され、利用者、住民が反発しているとの記事（3 ページ）。この提言をしたのが「埼玉県公の施設のあり方有識者会議」。知事が委嘱した「公共施設のマネジメント等について優れた見識を有する者」4 人が委員。大学の経済学部、工学部、官民連携研究所、政策投資銀行のスタッフ。伊豆潮風館の廃止を提言したのもこの会議だ。利用者や住民の頭越しに知事直属の専門家が政策を作っていく。これは危うい政治手法ではないだろうか。（有）</div>		